



聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「縁結びのハワイアン」 - 葛西に暮らして67年 -

せきぐちちづこ
関口千鶴子

1930年(昭和5年)
神奈川県横浜市生まれ、
西葛西在住



聞こえてくるハワイアン

夜になると、どこからともなく、「アロハ・オエ」を奏でるスチールギターの音が聞こえてきたんです。昭和25、6年ごろ、葛西はほとんどが田んぼ。聞こえてくる方向を見渡すと、南西の方向に家が何軒かあるのが見えました。戦後、ハワイアンと言えばパッキー白片や大橋節夫とかが有名でしたからね。「どんな人が弾いているのかなあ」と思っていたんです。

わたしが生まれたのは横浜なんです。3人きょうだいの真中で、兄とは3つ、弟とは2つ違い。昭和20年の空襲で、東京が焼かれた後、横浜や平塚が危なくなってきた。女学校2年生の15歳の時、今の地下鉄東西線葛西駅近くに越して来んです。父の会社のコンクリートミキサーの工場があったからね。

四谷にある女学校には、錦糸町駅から省線(現JR)か都電に乗って通いました。錦糸町までのバスがあったけれど、浦安から乗って来る行商の人でいっぱいなの。満員で乗れないと1時間半くらい歩きましたよ。錦糸町は関所でした。そこに出ないとどこにも行けない。新小岩に行くのでさえ錦糸町に出たんですから。

女学校卒業後は、2つの洋裁方を習いに行きました。文化式の特徴は着易く、ドレメ式は体にぴったりなんです。お花や和裁も習いに行っていたので、青年団に入るまで、地元の人と接する機会はほとんど無かったですね。

青年団は、地域の青年男女の親睦会のようなものなんです。父が「ここに住んでいる以上、地元との付き合いはしなければ」と言っても、兄は本ばかり読んでる人で聞こえないふり。「じゃ、わたしが行くわ」ということになったんです。

最初は、わたしが青年団の会合に顔を出すだけでした。そのうち、機械好きの弟が自分で組み立てたレコードプレーヤーをお寺の本堂に持って行って、流行曲やジャズやクラシックの音楽鑑賞をしたんです。わたしも、「第九」とか「田園」をちょっと解説したりして。みんな喜んで来てくれてね。

その後、農民館ができたので、会議室を借りて社交タ

ンスをやるとういうことになったんです。戦後、浅草の松屋、銀座の松坂屋、日本橋の白木屋といったデパートの上に日本人が入れるダンスホールができて、ダンスが流行っていたんですね。

農民館ですから、会議室が空いている時だけで、土足禁止なので靴も脱いでね。ダンスは、「PX」と呼ばれるアメリカ軍基地売店に勤めていた近所の人が、ソシアルの基本から教えてくれました。あのころは、ジルバなんか踊ったら不良と言われたんですよ。

青年団のみんなは、夜、仲間の家に集まって練習をしていたようです。でも、わたしは、うちが厳しくて夜は出してもらえないので、行けませんでした。青年団の役員会に行くにしても、帰りが遅くなるとみんなが途中まで送ってくれて、母に引き渡されて戻ってくるという生活でしたからね。わたしが初めてダンスホールに行ったのは、結婚後だったんですよ。

何でも挑戦

昭和28年に23歳で結婚しました。相手は、あのハワイアンの人。主人は4人きょうだいの一番下で、わたしと同年。音楽が好きでハワイアンバンドを組みスチールギターを弾いていたんです。うちの弟がラジオの組み立てをしてあげて、自然に家に来るようになったんですよ。

青年団に入ってすぐに彼だと分かりましたが、そういう話をしたことはなくて。結婚してから「わたしの家まで、ハワイアンが聞こえてきたのよ」って言ったら、「うそだ」って信用しませんでした。

当時、葛西は半農半漁の村。葛西浦漁業組合には組合員が千数百人いて、冬は海苔、夏はアサリ採りをしていました。主人の実家では、つぼ網という定置網漁もしていました。定置網漁は東京都の許可が必要で、組合員の中でも、それができるのは葛西と船堀地区合わせても5、6軒だけでした。

主人も結婚と同時に独立して始めたんです。網の形が壺みたいな胴部分に入ってきた魚を、酸素ポンプを積んで車で、活魚のまま市場へ持って行きます。スズキや鯛も獲れましたよ。11月から3月の海苔の時期は、日曜も正月

